

8章 遙かな謀略

(1)

二日後の火曜日、夕刻近くになって竹崎姉妹が三人の部屋を訪れた。

「札幌では大変失礼いたしました」

ライトグレーのスーツに身を包んだ姉の由布子は、無表情に、かといって儀礼的とも違
う、たおやかな所作で頭をさげた。新千歳空港での印象とはまるで違い、意識の鎧よろいのよう
に、凜りんとした気品を全身にまといっている。

それとは対照的に、七海は、ホテルのロゴが入った大ぶりのバッグを手にし、上背のあ
る体を屈め、虚ろな視線を床のあたりに這はわせていた。

ソファから立ち上がった福田が、棘とげを含んだ口調で応えた。

「竹崎さん、見事に騙だまされましたよ。女つてのは恐ろしいですね。まさに涙は女の第二の
武器ですか……どうせなら第一の武器も使つて欲しかったですがね」

その皮肉を不敵な笑みで受け流した由布子は、「お預かりしたものをお返しします」と
背後の七海に目配せした。

七海は目を伏せたまま三人に歩み寄り、「どうぞ」とバッグの口を開いた。なかには没
収された衣類がひとつひとつナイロンに包装されていた。

「これが返されるということは、いよいよ解放というわけですね？」

福田は由布子をジロっと睨にらんだ。

「はい」

「長嶺氏はお見えにならないんですか？」

しかし由布子は、それには応えず、

「寝室でお着替えください。駅までは七海が車でお送りします」

「携帯電話やほかの持ち物は？」

「駅でお返しします。どうぞあちらでお着替えください」

由布子に促され、隣のベッドルームに移動した三人は衣類を包んだナイロンを乱暴に破
り、着替えをはじめた。

「妹さんのほうも第一の武器は未使用だったの？」

Tシャツから首を出した則尾が雅人をからかう。

「則尾さん……」

雅人が声を殺して諫いさめると、則尾は「えへへ」と苦笑いをして、福田を振り返った。

「ところでさあ、ホテルから支給されたトランクス、どうしたらいいのかね？」

「そんなものバスローブと一緒にバッグへ突っ込んでおけよ」

福田は辟易と顔をしかめた。

五井駅で車から降りた三人に、七海はそれぞれの持ち物と携帯電話を返した。

「竹崎さん、これからどうするつもりですか？」

携帯電話の電源を入れながら雅人は小声で聞いた。すでに七海を問い詰める気力は萎え
ている。ただなにもいわずに別れることが忍びなかった。

「ごめんなさい……」

逃げるように運転席へ身を滑り込ませた七海は、乱暴に車を発進させた。

白い車体が遠ざかるにつれて、心に終息感のような虚しさが広がる。その虚無感から逃れようと、雅人は無理やり意識を現実へ戻し、携帯電話の留守録を確認した。

二日のあいだに留守録センターの容量は目一杯まで使われていた。ほとんどが手塚部長からのメッセージだが、ときおり美悠の心配そうな声が入っている。最終のメッセージは、その日の午後一時十五分の着信で、『頼むからなんとか連絡してくれよ……』と泣きつくような手塚の声だった。

「大前くん、相当に入ってるみたいだね」

すでに自分の留守録を聞き終えた則尾が、長い留守録メッセージに顔をしかめる雅人を憐れんだ。

「ヤバイですよ……とくに手塚部長はかなり怒ってます」

「ボクにも何回か入っていたよ。あいつ、本当に心配症だな」

「例の企画が山場ですし、二日間近く連絡不能じゃ、しょうがないですよ」

「ボクからヤツに連絡を入れようか？ 大前くんじゃあ角が立ちそうだし」

「いや、オレからします。でもその前に企画部の恩田部長に連絡を入れないと……手塚部長へは恩田部長から伝えてもらいます」

雅人は直属の上司である恩田部長に連絡した。雅人の声を聞いた恩田は、『大前くんか……』と息をのんだが、すぐに『結城さんから聞いたがトラブルに巻き込まれたんだって？もう自由になったのか？』と意外なことをいった。

《ミュウちゃんが？ どうしてオレの状況を知っているんだ？》

混乱する雅人に恩田部長は温和な声で告げた。

——もし、きょう中に連絡がなかったら警察に捜索願を出すつもりだった。とりあえず警察に連絡を入れて、トラブルの事情を話しておきなさい。

「警察へですか？」

オウム返しに聞いたとき、福田が背後から肩をたたいた。

「その必要はないよ。ほら」

彼が顎で指した方角には、ロータリーからこちらに歩いて来る二人の男の姿があった。

「誰ですか？」

「たぶん警察か公安だろう」

雅人は慌てて、「これから社に戻りますから、詳しい報告はそのときにします。それから則尾さんも一緒にいますから心配ないと手塚部長に伝えてください」と早口でいい、電話を切った。

近づいて来たのは律儀にネクタイをした中年の男だった。

「ちょっとすみませんが」

二人のうち、年長に見える髪の毛の薄い男が福田を呼びとめた。

「公安調査庁の者ですが、あなたがた、新近江グランドリゾートから出てきましたね」

男はいきなり威圧的にいい、身分証を示した。

「ええ宿泊していましたが、それがどうかしましたか？」

福田は身分証を一瞥し、素っ気なく応えた。

「いつからお泊りですか？」

「私は一週間ほど前からですが、この二人はおとといからです」

「宿泊中に変わったことはありませんでしたか？」

「変わったこと？ 気がつきませんでしたけど、公安のかたがいるってことは、あのホテルに反国家的な団体の関係者でも泊まっているんですか？」

「しゃあしゃあとした福田の態度に、公安調査官は額の汗を手で拭い、顔をしかめた。

「なにもお気づきにならなかったのなら結構です。申し訳ありませんがあなたがたのお名前と職業を教えてくださいませんか？」

「いいですよ」

福田はバッグから名刺を出し、則尾と雅人にもそうするよう促した。三人の名刺をしげしげと見た二人の調査官は、怪訝な表情のまま「お手間を取らせました」と目礼し、ロータリーの車へ戻った。

「福田、あれはおまえの保険だろう？ こんなに邪険にしているの？」

構内へと歩きはじめた福田に則尾がいった。

「いろいろ聞かれるのも面倒だし、保険はもう充分に活用させてもらったよ」

「福田の名刺を見ても反応しなかったところをみると、おまえのクライアントは個人名まではリークしていなかったんだな」

「たぶんな……」

曖昧に応えながら携帯電話をいじっていた福田は、

「おい、長嶺のニュースやっているぜ！」

昂然とワンセグの画面を二人に向けた。画面の報道番組では、『四季観光産業会長・長嶺氏、札幌市内で解放される！』と字幕が流れ、報道陣にもみくちやにされて病院へ入る長嶺のうしろ姿が小さく映し出されていた。

「俺たちと会見したあと、札幌に向かったのかな。二日間の意味はこれだったんだな」

アナウンスでは『誘拐されていた四季観光産業の長嶺善季会長は、九日早朝、札幌大通り公園で開放され、自力で札幌近江ランドホテルに戻ったもよう。健康状態を調べるため、すぐに市内の病院に入院しました。なお、この拉致・誘拐事件は、事件の性質上、極秘に捜査が……』と警察が発表した事件概要を述べ、最後に『身代金の支払いに関し、四季観光産業側は、警察による今後の捜査の都合もありノーコメントということですよ』と伝えた。

FT企画課の部屋では、憔悴した手塚部長と、苦虫を噛み潰したような顔の恩田部長が雁首をならべ、その背後で美悠をはじめとする課員たちが啞然として待ち構えていた。

「警察には連絡したのか？」

最初に声を発したのは恩田部長だった。

「ちようど部長に電話をしているときに公安調査官が来て、尋問されました」

すると手塚が憔悴した顔に非難を浮かべ、

「大前、千葉でやばいことでもしてたのか？」

「ちよっとしたごたごたに巻き込まれて……でも、これ以上騒ぎが大きくなったら今後の仕事にも差し支えますし、穏便にすませたほうがいいと思って、公安調査官には現地のホテルで宿泊していたことにしました」

「お気楽なこといつてやがる。こっちは搜索願を出すところだったんだぞ！」

興奮して声を尖らせた手塚を、「まあまあ」と恩田が宥める。

「とにかく無事でよかった。大前くんも疲れているだろうから、今日はもう帰りたまえ。事情は明日じっくり聞くから……手塚部長、それでどうですか？」

渋々うなずいた手塚は、「それまでに始末書を書いておけよ。まったく仕事が切羽つまってるのによお、こっちはオーマイガ！だぜ」と両手を広げて天を仰いだ。久々のギャグに課員たちから忍び笑いがもれる。

そのなかで美悠がひとり、無然と雅人を見つめていた。

「申し訳ありませんでした。今日はこれで帰らせていただきます」

両部長が引き上げたあと、雅人は自分のデスクで不在の間に寄せられた伝言書を確認し、美悠に声をかけた。

「ミュウちゃん、聞きたいことがあるんだけど、まだあがれない？」

美悠はかすかな戸惑いを浮かべたが、「すぐ用意します」と帰り支度をはじめた。

会社を出た雅人は、すぐうしろを悄然と歩く美悠を振り返った。

「恩田部長がいつてたけど、ミュウちゃんはどうしてオレたちが拉致されていることを知ってたの？」

退社時刻を迎えた歩道には人があふれている。雑踏をよけながら美悠が小声でいった。

「昨日の昼頃、竹崎先輩から電話があったんです」

「竹崎さんから!？」

「課長は無事で、明日の夜までには帰るから心配しないように……それに、このことはほかにはいわないように……でも私、恩田部長にだけは報告しました」

「今回の事件のことも話したの？」

「そんなこと話しませんよ。課長から連絡があったことにして、ちよつとした事件に巻き込まれて房総のホテルにいるけど、火曜の夜までには戻るから大丈夫だって……竹崎先輩は課長のいる場所は教えてくれませんでしたから、私から市原の新近江ランドリゾートじゃないかって聞いたんです。そしたら驚いていました」

「そうだったのか……」

「課長、竹崎先輩と一緒にだったんですか？」

「え!？」

思わず美悠の横顔をのぞき込む。しかし彼女は、雅人を無視するように、キリつとした目で前を見つめていた。

「彼女とはほとんど逢っていない。ずっと則尾さんや福田さんと一緒にだった」

「そうですか……」

無然とうなずいた美悠は、思いついたように「あっ」と小声を発し、深刻な表情で雅人を見上げた。

「課長……長嶺会長のニュース、知ってますか？」

「うん、ワンセグのニュースを見た」

「あの誘拐は偽装なんでしょう？」

「それは……」

雅人は言葉をにごし、「どこかで夕飯を食べない？」と誘った。

「課長、話してくれるんでしょう？」

美悠が不満そうに頬をふくらませる。

「なにを？」

「今回のことに決まってるじゃないですか。私には聞く権利があると思いますけど」
美悠は勝気な瞳で雅人を睨んだ。

「わかったわかった、話すよ……でも、このへんの店じゃ会社の人間に出くわすかもしれないし……とりあえず東京駅へ行こう。あそこならミュウちゃんの通勤経路だし、俺も一本で帰れるからな。ミュウちゃん、東京駅の近辺で静かな店、知らない？」

「構内のグルメ街はどうですか？　わりに広いイタリアンレストランがありますけど」

「そこにしよう」

雅人は美悠の通勤路線である地下鉄・丸の内線の後樂園駅へ足を向けた。

東京駅にも人波が渦巻いていた。しかし美悠に案内されたイタリアンレストランは、駅中の店とは思えないほど静かな空間だった。

食事をしながら、雅人は四日間の顛末をかいつまんで話した。

「やっぱりカシオペアの事件には竹崎先輩が関係していたんですね……」

リゾットのスプーンをテーブルに戻した美悠は、鎮痛な面持ちで吐息した。

「まだ想像の段階だよ」

「竹崎先輩、このあとどうするんだろう？」

その言葉が雅人の心にある七海への思慕を刺激する。

「さあね……」

必死に無関心を装ったとき、美優が思いついたように顔を上げた。

「課長、竹崎先輩に連絡してみませんか？」

もとよりその思いは心に疼うずいている。しかし五井駅での七海の態度がそれを拒んでいた。

「しないほうがいいと思うけど……」

「なにを迷ってるんですか。課長は軟禁されてたんですよ。それに事件の成り行き次第では課長の人生に関わる問題じゃないですか」

「おどかすなよ」

「関わりますよ。今回の無断欠勤だって、もう大きく関わってるんだから……さあ、早くかけてください。それとも私の前じゃあかけにくいですか？」

美悠の目が悲しげに翳り、薄紅色の唇が真一文字に結ばれる。その表情を見ているうちに迷いが薄らいだ。

雅人はポケットから携帯電話を出し、七海の番号をプッシュした。しかしコール音を聞くあいだ、心では出て欲しい気持ちと出ないほうが楽だという気持ちが暗闘していた。

《出るわけないよ……》

諦めて電話を切ろうとしたとき、コール音が途絶え、『はい』と七海の声が応えた。

「あ、あの、大前ですが……」

——わかっています。もうお部屋へは戻られましたか？

「いえ、まだ外にいます」

——長嶺のことはご存知ですよね？

「テレビのニュースで見ました」

わずかな沈黙のあと、七海は気を取り直したように声のトーンを変えた。

——警察か公安にお報せになるおつもりですか？

「そんなつもりはありませんけど……」

——ありがとう。

「べつにお札をいわれることじゃあ……」

——長嶺も、あなたがたなら理解してくれると申ししていました。

「信用されたというわけですか？」

——信用ではなく、よき理解者だという信頼です。

「そうですか……」

——大前さん、お元気でがんばってください。

電話が切れそうな気配を感じ、雅人は慌てて話をつないだ。

「ちよ、ちよっと待ってください。五井駅でも聞きましたけど、竹崎さんはこれからどうするつもりかですか？」

——……。

「それだけでいいから教えてください」

沈黙の背後に、震えるような息づきが聞こえる。やがて大きく息を吸った七海は、吐息とともに息声でつぶやいた。

——転勤します……。

「転勤？ どこへ？」

——海外です。詳しくは申しあげられません……。

「いつから行くんですか？」

——それも申しあげられません。

拒絶した七海は、もう一度大きく息を吸い、

——大前さん、私の大前さんへの気持ち……嘘ではありませんでした。あなたの旅への想いも、まっすぐに物事へ挑む姿勢も大好きでした。あのときいったことは本当です。こんな状況でなく、あなたと逢いたかった……もう切ります。さようなら……。

雅人の未練を断つように電話が切れた。

「竹崎先輩……転勤するんですか？」

じつと聞いていた美悠が、戸惑いを浮かべて雅人をのぞき込む。

「海外の支店へ行くといってた……」

「どこの支店なんですか？」

「オレには知られたくないらしい……」

「……」

美悠は黙って顔を伏せた。

翌朝、いつもより二時間ほど早く出社した雅人は、デスクのパソコンで始末書を打ち、始業時間を待って恩田部長へ提出した。

すぐに手塚が呼ばれ、始末書に沿って型どおりの質疑が行われる。それが終わったとき、

手塚はわざとらしく大きなため息をついた。

「ゆうべ則尾に連絡して詰めたよ。おまえらやっぱり俺に内緒で変なことに首を突っ込んでいたんだな……まあ今回のことはもういい。幸い俺たちより上には情報も伝わってないし。まあ、俺と恩田部長にでかい借りができたってわけだ。とにかく今回の企画に全力で取り組め。もしうまくいったらそれでオレたちへの借りも返せるし、今回の無断欠勤の懲罰も御破算だ」

則尾がどこまで話したかはわからないが、手塚が追求してこないところを見ると、口止めを条件に、かなりきわどい内容まで聞いているようである。

昼近くになって、その則尾から連絡が入った。

——例の誘拐事件さ、メディアでは企業ぐるみの疑獄事件じゃないかっていわれてるね。

「ニュースを見てないから、わかりませんけど……」

——ダウンしちゃったの？ 若いのにならしないなあ。

「宮仕えですから、則尾さんたちとは違うストレスがあるんですよ」

——そうだよなあ。でも手塚にはボクからちゃんと弁明しておいたぜ。

「知ってます。朝の懲罰会議で聞きましたよ」

——とりあえず事態を静観するしかないな。

「長嶺会長の計画もこれでペアですかね？」

——そんなことあるわけないよ。先々の計画もなしにこんな行動をとるもんか。

「どうなるんですか？」

——わからないけど……たぶんなにか起こるよ。楽しみに静観しようぜ！ しばらくはフルムーン企画で忙しくなりそうだしね。

雅人を励ますように、則尾は陽気にいった。

(2)

則尾の言葉どおり、フルムーン企画の進行は佳境に突入し、雅人は仕事に負われた。

長嶺の誘拐事件は、ときおりニュースの片隅に顔を出したが、警察からの詳しい発表はなく、四季観光産業も北嶺資源開発もノーコメント、さらに長嶺自身もメディアを避けているため、勝手な憶測だけが飛び交った。

美悠はあれから事件の話題はいつさい口にしない。ときおり会社に顔を出す則尾も、意識してかそのことを口にしなかった。

解放から十日ほどして福田から連絡があった。今回の調査に関し、クライアントから謝礼が入ったので、手伝ってもらった雅人にもお裾わけすそわけをするという。

「そんなこといいですよ」

——たいした額じゃないから気にするな。キミの口座を教えてくれ。

「気を使わなくてもいいですよ」

——則尾にもお礼をするんだから、大前くんにもさせてくれ。

雅人は渋々口座を教えた。

それから二日後の午前中、則尾から礼金のことで連絡がはいった。

——福田からの礼金、受け取った？

「いや、まだ銀行へ行っていません」

——すぐに確認してみなよ。

思わせぶりにいった則尾は、

——きょうの夜、仕事が終わったら会えない？

「いいですよ」

——市川へ戻るのは何時頃になりそう？

「そうですね、八時過ぎにはあがれると思うから市川へは九時前ぐらいですかね」

——それじゃあ九時に市川駅へ行くよ。夕飯でも食おう。

「なにかあるんですか？」

——会ってから話すよ。

そのときは則尾の言葉を深く考えず目先の仕事に戻ったが、ランチを食べに外へ出たとき、彼の思わせぶりなセリフを思い出し、銀行のATMで口座を確認してみた。

残高照会の数字の桁に雅人は目を疑った。

《五百万！》

何度見直しても金額は変わらない。記憶している残高よりもひと桁多い金額、それも五百万円多い金額が表示されている。

《まさか……》

現実とは思えなかった。

「則尾さん、振込み金額を見ました！」

市川駅の改札から出てきた則尾に、雅人は昂然といった。

「驚いただろう」

その言葉とは裏腹に、則尾は無表情だった。

「あんな金額、まずいですよ」

「まずくなんかないさ。福田のお礼なんだから」

「それにしても……」

「貰っておけよ。それよりどこか旨い店を知らない？」

雅人は常連になっている小料理屋へと則尾を案内した。懐が温かいためか、則尾は時価の刺身の盛り合わせを二人前注文した。

「ボクも福田から礼金の話があったときは、多くても四、五十万だと踏んでたから、金額を見たとき驚いたよ。予想の十倍だぜ。それですぐに福田のところに行ったんだ」

ビールで乾杯した則尾は口の泡を拭った。

「福田のやつ、あまり話したがらなかったけど、クライアントだけは白状させた」

「誰だったんですか？」

すると則尾は雅人の耳に顔を近づけた。

「ロシアンマフィアだよ」

「ええ！？」

「といっても直接的にはロシアンマフィアから依頼された日本の企業らしい。それも亀山議員の後援会関係の企業だよ。考えてみればあいつ、長嶺誘拐のときロシアンマフィアの線否定していたじゃないか。普通に考えればその線のほうが合理的なのにな。北海道で入手した長嶺の著書だってそのルートから手に入れたに違いない」

そのあと彼は、苦々しくビールを飲み、

「ブラックジャーナリズムなんていつてたけど、あいつの本当の情報源は、北海道のクライアント企業と、その背後にいるロシアンファイアだったのさ。おそらく今回の事件が起こる前から、ロシア側も亀山や白石を通じてM Aファンドの件や北嶺観光開発と北条エナジーの動きを知っていたのさ」

「でもロシアは東アジア政経連合構想からは外れているでしょう？」

「そのあたりは、亀山や白石が事実を糊塗して丸め込んだんだと思う。たとえばサハリン2の日露共同事業化なんかを餌にしてさ」

「サハリン2？」

「樺太の液化天然ガス田だよ。その施設建設に日本の資本と技術を供与するっていう政治的な動きを餌にした可能性もあるってことさ。それが殺害され、裏で米政府が動いているらしいとなれば、ロシア側が真相解明に躍起になるのもうなずける」

則尾は、お通しの枝豆を二、三個続けて口に放り込んだ。

「千歳空港で竹崎由布子と会った時点で、福田は彼女への接近を画策したんだろうな」

「でも札幌近江ランドホテルへ誘ったのは彼女ですよ」

「つまりはタヌキとキツネの化かし合いつてやつさ。竹崎由布子にしたって目障りなやつらを近くにおいて、情報を得たいと思ったんだよ。ボクと大前くんはその茶番劇に無理やり登場させられたってこと。まあ……裏でロシアンファイアが動いていれば、あの程度の情報は入るよな。金だつて動くはずだ」

「それでこんな金額だったんですか……」

「おそらく福田への報酬は五、六千万つてところだ。ボクと大前くんそれぞれ一割の謝礼って感じかな」

「そんな大金が絡んでいたんですね……」

「ははは、最初に紹介したとき福田は金のおに敏感だつていったじゃないか。でもね、裏社会にはこの程度の金額が絡む話はごろごろしているぜ」

「サラリーマンには縁のない金額ですね」

「フリーランスだつて縁がないよ。というより、額に汗あせして真面目に生きている人間には縁がない報酬だ。でもファンドとか金融にかかわっている連中は違う。ちよつと羽振りがいいファンドのマネージャークラスだったら年収でこれぐらい稼ぐよ」

「五千万も？」

「一億稼ぐやつだっている。まったく他人の金を転がしているだけなのにさ。なにも生産しないやつらが莫大な報酬を得てるんだ。こんなのがまかり通ってきたんだから、アメリカの経済が傾くのは当然だよ」

「これからどうなるんですかね？」

「アメリカのこと？ それとも今回の事件のこと？」

「両方ですよ」

「今回の事件に関してはよくわからないけど、アメリカ経済のことなら簡単だ。もっと深刻になるよ」

「サブプライムローンってそんなに大きな影響があるんですか？」

「IMFがおととしの四月に発表したサブプライムローンの損失額は世界で約百兆円、こ

の先も現在の倍ぐらいまでは膨らむと予想されてるぜ」

「二百兆円ですか！」

「あのとき長嶺もいっていたけど、サブプライム問題はトリガーに過ぎない。今後、米国経済はこれまでの金融至上経済の膿をどっと噴出させながら急速にしぼみ、そのあおりを食らって世界経済が今以上に混乱しそうな気がする。長嶺はアメリカに比べて日本の金融経済と実体経済のギャップは小さいっていついていたけど、日本も危ないぜ」

「そうなるよ、やっぱり東アジア政経連合……ですか？」

「長嶺はそう考えているようだけど、はたしてどうなることやら……幸いにも彼の計画はまだ世間に知られていないようだから、これからも水面下で動くんだろうな。でもボクらがそんな心配してもしょうがない。不景気風が吹き荒れそうだけど、とにかく当面はフルムーン企画を成功させなけりやね」

「あれが滑ったらウチの会社もマジでヤバイですから」

「それにしても……」

則尾は焦点の定まらない視線を虚空に向けた。

「竹崎姉妹はこれからどうするんだろう？ 大前くんには連絡がないの？」

七海の電話の声がよみがえる。やるせなさと思慕が混濁したような甘酸っぱく乾いた感情が胸に渦巻いた。

「ありませんよ……オレは利用されていただけですから……」

雅人はビールの苦味とともにその感情を飲み込んだ。

七月最後の週になって、フルムーン企画のパンフレットの色校正が出た。縦組みの活字を用いた雑誌風のレイアウトで、大胆に使った写真も効果を發揮している。その出来栄えに手塚部長はご満悦だった。

「いいじゃないの。俺の写真選定もバッチリよ。則尾も四時にはこっちへ来る予定だから、あいつが来たら色校をチェックしようぜ」

しかし午後二時をまわったとき、則尾がひょっこりFT課に顔を出した。

「あれ？ 四時の予定じゃなかったんですか？ あ、パンフの色校を見ましたよ。けっこうグーですね！」

勇んで報告する雅人を則尾は浮かない面持ちで手招きした。

「ちよつと時間ある？」

「深刻な顔して、どうしたんですか？」

「ちよつと会議室へ行こうよ」

則尾は強引に雅人を誘った。

通路を挟んだ向かいにある会議室は、おもに取引先との打ち合わせなどに使われている。二十畳ほどの空間がパテーションで区切られ、四つの半個室があった。そのうちのひとつに雅人を引き込んだ則尾はいきなりバッグから週刊誌を取り出した。

「きょう発売の週刊誌だけ……」

則尾がテーブルに広げた週刊誌には、見開きをぶち抜いて大きな活字が躍っていた。

「え！ これって!？」

「長嶺らの動きがすっぱ抜かれている。中身を読めばもつと驚くよ」

週刊誌には、『北嶺観光開発の長嶺氏に偽装誘拐の疑惑！？』というタイトルに続き、本文中には『M Aファンドは実在する？』『C I Aの陰謀か？』『亀山元議員と白石局長の死にも関与か？』『公安当局も情報を隠匿か？』など事件の核心に触れる見出しが、クエスチョンマーク付ではあるが、読者の好奇心を煽り立てている。

「どうして……」

雅人は混乱した頭で見出しを追った。

「たぶん福田の情報だ」

「福田さんが……」

「直接的にじゃないと思う。たぶん福田から情報を得たロシアンマフィアがリークしたんだ。長嶺たちの動きを抑えるためだろう。それしか考えられない。読んでみればわかるけど、情報を提供したのは長嶺たちの関係者であるはずがないし、日本政府や公安でもない。ましてアメリカ政府やC I Aがこんなことをしたってなんのメリットもない。それに、しかるべきスジからの情報でなかったら週刊誌側もこれほど大胆に掲載できないよ」

則尾は歯をかみしめ、怒りと焦燥が混じった目で雅人を見つめた。

週刊誌の記事は夜のトップニュースになった。

メディアはこぞって記事の話題を取りあげ、評論家たちは、もっともらしい論調で今回の事件を分析した。メディアは週刊誌の発行元にも押し寄せたが、発行元は『情報源は明かせない』の一点張り。当然、四季観光産業や北嶺観光開発、さらには北条エナジーや亀山元議員の後援会などもメディアの餌食になった。しかしそれらはすべてノーコメントを貫いた。ただ政府関係者のみが、記事はデマだと冷やかに述べ、冷静に対処せよと警告を発した。

取材攻勢が最も激しかったのは長嶺が入院療養している病院だった。長嶺が拉致・誘拐から解放されたときのようになり、多くの中継車が病院前に集結し、ライトを容赦なく照射して実況を流した。

ニュースを見た雅人はすぐに則尾の携帯へ連絡した。

「すごいよなあ。」

則尾もこの反響には度肝を抜かれたようである。

「どうなるんでしょう？」

「でも、メディアは熱しやすく冷めやすいからね。それに政府関係者も否定しているよ。うだし、大山鳴動してネズミ一匹って感じになるんじゃないかな。」

「でも、長嶺会長はもう水面下で動けませんね」

「うん……。」

物憂げにつぶやいた則尾は、

「考えみれば、C I Aが動いた時点で今回の計画は終わっていたのかもしれない。時代を読み違えたって、あるとき長嶺もいつてたじゃないか。」

「でもC I Aの介入後も長嶺会長は動いていたんでしょう？」

「最後のあがきだったのかなあ。」

「長嶺会長、これからどうするんでしょうね」

雅人は長嶺の背後に七海の面影を見ていた。

——物証はなにもないんだから、週刊誌の発売元を相手に名譽毀損かなんかで告訴でもするんじゃないの。それにこの記事は政府も認めないはずだよ。CIAが亀山と白石を殺害したなんて事実を認めたら米国が黙っちゃいけないからね。だからマスコミもこれ以上事件をほじくり返すのは難しいんじゃないかな。ほら、人の噂も七十五日とかいうじゃない。そのうちに、このことも忘れられるよ。世界経済が混乱している時機なんだから、そっちのほうがずっと重大事だ。長嶺もそれを狙っているんじゃないかな。

興味なさそうにいった則尾は、「それよりさ」と声をひそめ、

——こんなことになってみると福田からの礼金も精神的に重いよな。

「そうですね……」

そうつぶやいたとき携帯電話が別の着信を告げた。

「あ、ほかから入ったみたいですよ。とりあえず切りますね」

通話を切った画面に、美悠の携帯ナンバーが表示されている。「はい」と出たとたん、『課長ですか!』と甲高い声が飛び込んだ。

「そうだよ。そっちがかけたんだろう?」

——そうじゃなくてニュースですよ! あの情報源は課長たちじゃないんですか!?

「オレたちじゃない。今もこのことで則尾さんとも話していたところさ」

——じゃあ誰なんですか!?

「則尾さんの推測では福田さんのクライアントかもしれないってことだけ……」

——だからあ、クライアントって誰なんですか?

美悠は哀願するように声を震わせた。雅人は躊躇したが、絶対に他言はしないようにと釘を刺し、福田のクライアントを教えた。

美悠は『えっ!』と息のみ、言葉を失ってしまった。

「ミュウちゃん、正直、オレもパニックっているんだ。えらいことに巻き込まれちゃったみたいで……」

……。

「現実感がなくなってきた……」

美悠が鼻をすする。

「ミュウちゃん」

——はい……。

震える涙声で応え、また鼻をすする。

「さっき則尾さんもいってたけど、長嶺会長は週刊誌の発行元を告訴するかもしれないよ。でも結局、真実は世に出ない。世間にあふれる情報なんてそんなもんさ。そんな情報に振り回されているようじゃあ永遠に真実なんて見えないよ」

いいながら雅人の脳裏には七海の姿が浮かんでいた。

《オレもリークした仲間だと思われような……》

冷たい絶望感とともに、七海の唇の感触と南国の花の香りが脳裏をよぎった。

(3)

則尾の予想に反し、長嶺はなんの行動も起こさず、世間を騒がせたニュースも、七十五日どころか一週間もしないうちにメディアからフェイドアウトした。

ただ一連の騒動は日米政府の裏や今後のアジアにおける経済圏、日本の農業やエネルギー行政、さらには戦後の日米関係など、時流の話題に絡んだ論議へと発展していった。

しかし月が変わった八月初旬、沈静しかけた事態が再燃した。

長嶺善季が、突然、北嶺観光開発の社長職と四季観光産業の会長職を辞し、竹崎由布子も四季トラベルビューロの社長から退いたことが伝えられ、その数日後、北条宗太郎も北条エナジーの社長の座を副社長に譲り、第一線から身を引いたのである。

いずれも会社側からの一方的な発表だったが、巷には『一連の騒動の責任を取った』とか『ケジメをつけた』とか、勝手な憶測が飛び交った。

猛暑日が続くなか、雅人はフルムーン企画の詰めを身を投じた。

長嶺関連のニュースはすぐにメディアから消え、世間の関心は経済問題や国内政局問題など、目先のことだけをしつこく掘り起こす、いつもの報道内容へと戻っていった。その合間を埋めるように、今夏のボーナスの話題や異常気象の話題、あるいは夏期休暇に関連した話題などが増えてくる。

フルムーン企画は、旧盆の夏休みが終わるころ、JITの命運を背負って関東一円で販売される予定である。手塚部長は猛暑日の気温以上にヒートアップし、媒体編集部内はもとより、雅人の国内FIT課にも檄を飛ばした。先行する雑誌のパブリシティなどの反応も上々で、『かなりの問い合わせがある』と営業部から報告され、それも手塚のヒートアップに一役買っているようである。

しかし七月最後の週末、熱帯夜の気だるさを吹き飛ばすように、衝撃的なニュースが駆け巡った。

神戸市の海岸から望む明石海峡には、こんもりした森のような淡路島が横たわっている。

この狭い海峡をひとまたぎする全長三九一メートルの明石海峡大橋は、世界一の橋脚距離をもった吊橋として知られるが、上を走る神戸淡路鳴門自動車からの眺めは絶品で、無数の船が行き交う瀬戸内の海や、ビルが林立する神戸市、さらには濃緑の森を抱く淡路島など、思わず車を停めて眺めたくなるような景色が展望できる。

自動車専用道路であり、橋の全域が駐車禁止区域に指定されているが、それでも夜半など交通量が少ない時間帯は片側3車線の余裕に甘え、徐行運転で景色に見入る不心得者も少なくない。

午後七時頃、その明石海峡大橋から投身自殺があった。

すでに宵闇が明石海峡の瀬戸を沈ませ、パールブリッジの愛称がある明石海峡大橋が、虹色の照明のなかに浮かび上がる時刻である。

翌朝のメディアは、投身自殺を目撃したタクシー運転手の談話とともに、この事件を報じた。

目撃者の話によると、自殺者は男女2名。橋のなかほどの路肩近くに車を止め、タクシ

ーが駐車車両の脇を通過しようとした瞬間、欄干を越えて闇の海峡へ身を躍らせたという。目撃者から通報を受けた兵庫県警が現場に急行し、橋上に放置された車のナンバーから所有者の割り出しを行ったが、その車が、数週間前に世間を騒がせた長嶺善季のプライベートカーであることが発表されるやいなや、メディアがどっと食らいつき、報道番組を独占してしまった。

翌早朝から兵庫県警の水陸隊と海上保安庁による捜索が開始されたが、潮流の速さが災いし、遺体はおろか衣服すら発見できない状況である。一方、兵庫県警から依頼を受けた警視庁の調べで、長嶺善季が失踪していることがわかり、その行方を関係者に問い合わせている状況が発表された。

そうした警察発表とは別に、メディアも関係各所に独自の取材攻勢をかけ、長嶺善季とともに四季トラベルビューロの元社長・竹崎由布子の行方がわからないことを突きとめた。その事実から、投身自殺者の男女2名は、先だって話題の渦中にいた長嶺善季と竹崎由布子である可能性が高いと、うがった見方をするメディアさえあった。

一連の報道を見た美悠は憤慨して雅人に訴えた。

「福田さんのせいですよ。福田さんがあんな情報を流すから！」

「情報をリークしたのは福田さんじゃなくてロシアンマフィアに関連した連中だよ」

「課長、悔しくないんですか？」

「なにが？」

「とぼけないでください。課長や則尾さんは福田さんのために動いたんでしょ！？」

「それだけで動いたわけじゃあないよ」

「竹崎先輩のためですか？」

「それもあるけど……そのためだけでもない」

「じゃあなんのためなんですか？」

「オレにもよくわからないけど……自分自身を納得させるためだっていう気がするんだよ。ミュウちゃんだってそうだったんだろう？」

「それはありましたけど……」

「そのことはもう忘れよう。それより仕事へ集中だ。営業部からの報告じゃ、前宣伝の反応も上々だったことだしね」

雅人は、美悠とともに自分自身を励ました。

その夜、部屋でビールを飲んでるとき則尾から連絡が入った。

——長嶺たちのこと、意外な展開になったなあ。

「ええ、まさかこんなことになるなんて……ミュウちゃんは福田さんのせいだって憤慨してました」

——だろうなあ。ボクも最初のニュースを見たときはそう思った。それで、きょうの昼間、福田の事務所へ行って嫌味をいったんだけど……あいつ、まるで責任を感じてなかった。

「福田さんのようなビジネスには、それくらいの無神経さが必要なんでしょうね」

——無神経というより、福田は今回のことも長嶺たちの狂言芝居だって考えているぜ。

「ええ！」

——確かに福田の読みにも一理ある。つまり長嶺の車を使って子分の男女が明石海峡に飛び込む。もちろん、それなりの装備をしたうえに、それらしい扮装をしてね。下には仲間の船が待っていて、すぐに替え玉の二人を救出する……それで万事OK。だから飛び込む瞬間も、意図的に他の車から目撃されるように作為した。たとえ目撃されなくても、車が放置されていれば同じような結果になったはずだよ。考えてみれば狂言芝居や偽装工作はやつらのお得意芸だしね。

「なんのためにそんなことする必要はあるんですか？」

——存在を抹消し、今度こそ水面下で計画を推進するためさ。C I Aや公安の追及を逃れる有効な手だといえなくもない。

「長嶺会長や竹崎由布子は意図的にこの世から自分を抹殺し、一連の事件への追及をかわしたっていいことですか？」

——事件だけじゃなく今後の活動についてもだ。福田はそう見ている。

「北嶺観光開発や北条エナジーは営業を続けているんでしょう？」

——経営者も交代したし、おもて向きはこれまで通り営業するだろうね。でもさ、もし長嶺が生きるとしたら、いざというときにすぐ動けるじゃないか。

「いざというときってどんなときなんですか？」

——たとえば……C I Aが日本になど関わってられないほど、米政府や世界情勢が混乱する状況になるとか……そんなときかな。

「そんなときが来るんですかね？」

——ないとはいいい切れないよ。

自信なさそうにいった則尾はふいに話題を変えた。

——それよりさあ、手塚から聞いたんだけどブルームーンの評判、けっこういいらしいね。

「ええ、問い合わせもかなりあるみたいです。盆明けにパンフが支店にならびますから、そこで熟年層が則尾さんの紀行文にどう反応するかですね」

——ははは、怖いような楽しみなような、複雑な気分だな。

「オレも同じ心境ですよ」

電話のあと、雅人は部屋の窓を明け、夜の空気を吸った。蒸された大気とともに都会の喧騒が訪れる。その怪しい抑揚を聞いているうちに、ふと長嶺と由布子が生存しているような、そしてこの瞬間も革命への謀略を巡らせているような、そんな気がした。

盆明けから売り出されたブルームーン企画は予想以上の反響を呼んだ。

計画段階での営業目標は、初年度ということもあり、年内に百二十契約、売上金額で一千万円程度と控えめだったが、八月の二週間だけで四十組の申し込みがあり、九月に入ってもその勢いは衰えなかった。その反響に気をよくした上層部は当初の売上目標を倍増し、媒体編集部長の手塚は社内での株をぐんと上げた。

九月も二週目が終わる金曜日、F T企画課のスタッフの慰労を兼ねた祝勝会が開かれた。祝勝会といっても、今後の混乱が予想される経済状況では、まだ予断を許さないというところで、水道橋駅の近辺のビストロで軽く飲むという程度の会である。

会には則尾も招かれ、課員たちから賞賛のビール攻めにあつた。もともとアルコールに強くない則尾は、最初のジョッキ一杯で「我々が新しいブームをつくった」などと怪気炎を上げ、二杯目で顔を真っ赤にし、三杯目の途中でイビキをかきはじめた。

会がお開きになると、翌日からは敬老の日のハッピーマンデーを加えた3連休だという気安さもあり、独身課員からは2次会の氣勢が上がった。

「課長も則尾さんも独身でしょう。行きましようよ！」

美悠が潤んだ目で誘う。雅人は、足もとがおぼつかない則尾を気づかい、

「則尾さんはもう無理だよ。途中までオレが送っていくから気にするな」

「でも課長はほとんど飲んでないじゃないですか」

「家へ帰ってゆつくりやるさ。則尾さん、ほら、帰りますよ！」

その声で、だるそうに目をあけた則尾は、

「ん？ 帰るの……それじゃあ市川で飲み直しか？」

「なにいつてるんですか、もう飲めないでしょう？」

「ボクはダメだけど、大前くんはほとんど飲んでないんだろう？」

「聞いてたんですか？」

「聞いてたさ。このあいだの小料理屋へでも行くかい？ あそこの刺身、うまかったな。

ボクはお茶漬けと刺身でいいぜ」

「わかりました。とにかく帰りましょう」

そのやりとりを聞いた美悠は「ふうん」と冷めた目を向け、

「それじゃあ私も課長たちと小料理屋へつきあいますよ」

「ミュウちゃん、オレたちが行くのは市川だよ」

「あら、市川だったら横浜まで総武本線の快速一本で帰れますよ」

「マジかよ……」

「マジですよ」

美悠は独身課員どもの密かな期待をあっさり裏切り、ブーイングをもともせず、さつさと雅人たちに寄り添った。

「あれ、ミュウちゃんもボクラと一緒に来るの？」

やや正気を取り戻した則尾が怪訝にいう。

「迷惑ですか？」

「とんでもない大歓迎さ。そうかあ、ミュウちゃんがつきあってくれるのなら、お礼に面白いこと話しちゃおうかな」

「え〜！ 面白いことってなんですか！？」

「それは、あっちに着いてからのお楽しみ。そうそう、その店の地酒がうまいんだよ。ミユちゃんは、まだ飲める？」

「ぜんぜんいけますよ」

「酔いつぶれても大前課長の家があるから大丈夫だしね」

その言葉に雅人は無然とした。

「則尾さん、いい加減にしてくださいよ」

しかし美悠はひょうひょうとした顔で、

「そうですね、酔いつぶれたら課長の部屋へ泊めてもらおうかなあ」

「なんだよミュウちゃんまで……悪のりするなよ」

顔をしかめた雅人を無視し、則尾は嬉しそうに大口をあげた。

「やったあ！ な、大前くん。そうしようぜ！」

酔った二人の勢いにおされ、雅人はしぶしぶうなずいた。

「ほんと、この地酒、おいしいわあ！」

雅人の横の席に座り、グイ呑のみに口をつけた美悠は、最初の一杯を一息で飲み干した。

カウンターの奥で刺身を造っていた店主あなが、「うまいでしょう？」と愛想を返す。

「大前さんが、女性のお客さんを連れてくるなんて、初めてだね」

「オヤジさん、勘違いしないでよ。この娘はオレの部下だよ」

「ありや会社の人でしたか、こりゃあ失礼」

相変わらず乗りがいい。美悠もすぐにその雰囲気になじみ、

「あら、私が初めての同伴女性なんですか？ 怪しいなあ」

「なにをバカなこといつてるんだよ」

雅人は美悠の絡みから逃れようと、対面の席でフウフウ吐息を吐いてお茶を飲む赤ら顔の則尾に話題を振った。

「ところで則尾さん、面白い話ってなんですか？」

「そうそう、肝心なことを忘れてた。話ってのは今回の事件の謎に関することなんだ」

湯呑をおいた則尾はオシボリで額の汗を拭った。美悠は二杯目の地酒を嘗めながら、ねちっこい視線を則尾に絡ませた。

「謎って……まだ謎があるんですか？」

「一番の謎が残ってたんだな、これが」

「だからあ、焦らさないでくださいよ」

「ははは、わかったよ。一番の謎ってのは、なぜ3大秘湖だったかっていう謎だ。今回の事件の発端は3大秘湖での殺人事件だろう？ ボクらはそれを犯人のメッセージだと読んだ。な、大前くん、そうだったよな？」

「ええ、則尾さんは最初からなにかのメッセージだったっていましたね」

「そういうこと。でもダイイングメッセージなどでふりまわされ、いつの間にか頭から吹っ飛ばしまった」

一旦言葉を止めた則尾は、お茶をズズッとすすり、大仰な動作で湯呑をテーブルにドンと置いた。

「ところがだ、おとといの夜、北海道を特集している情報番組を見ていて、急に思いついたんだな、これが。というのはいさ……」

そのとき、「お待ちどうさま！」という威勢のいい声が則尾の話の腰を折った。満面に笑みを浮かべた店主が、茶漬けと刺身の盛り合わせを運んできた。

「サヨリのいいのが入りましたよ。それに、この前みえたとき旨いとおっしゃってたマコガレイの刺身とエンガワ、それとスズキのアライ、こんなところですかね。お嬢さん、どうぞ食べてみてください」

店主は刺身を盛った大皿をうやうやしくテーブルへおいた。

「すごい！ 則尾さんが食べたかった理由がわかる！」

真っ先にエンガワを口に運んだ美悠は満足そうに地酒をあおった。

「課長、いつもここで飲んでるんですか？」

「多くても週に二回だよ」

「へえ、私もたまには飲みにもようかなあ」

「ミュウちゃん……ちよっと飲み過ぎてない？」

「大丈夫ですよ、そんな心配しなくても……あ、則尾さん、テレビを見ていて思いついたことってなんですかあ？」

「ははは、酔ったミュウちゃんもなかなかいいな」

則尾は愉快そうに笑い、茶漬けを口に流し込むと、噛みもせずにゴクリと飲み込んだ。

「ボクが気づいたのは3大秘湖の立地なんだよ。なぜあの3つが3大秘湖に選定されたか、それは地元の観光協会でもハッキリしないんだけど、ボクからいわせりゃあ、現状の3大秘湖は役者不足だ。北海道には原生林の奥深くにひっそりと眠る神秘的な湖はいっぱいあるんだぜ。それにアイヌの伝説が残っている湖だつて多い。それなのに、なぜあの3つが選ばれたか、その秘密が今回のメッセージにも関係しているんだ」

則尾は息おいてサヨリの刺身を頬張ると、それをおかずに茶漬けをすすった。

「それで、ボクは3大秘湖の共通点はなんだろうと考えてみた。そしたらあつたんだ。それが立地の共通点なんだよ。つまり、すぐ近くに大きな湖があるつていうこと。オンネトーには阿寒湖、東雲湖には然別湖、オコタンペ湖には支笏湖……どれも北海道じゃ有名な湖だし、大観光地だよ」

「それがメッセージとどう関係してるんですかあ？」

美悠はテーブルヘヒジをつき、だるそうに頬を支えた。

「逆に発想してみなよ。3大秘湖はどれも大きな湖に寄り添っていたからこそ、3大秘湖に選ばれた。単独でひっそりと息づく湖は、たとえアイヌの伝説に彩られた湖だったとしても、この選定には引っかけからなかった。これを日米の関係に置き換えてみればわかるだろう？」

「わかんない！」

手酌で酒をつぎながら美悠がなまめかしい声をあげた。ほかに客はなく、店は三人の独占状態だったが、雅人は慌てて美悠から徳利を取りあげた。

「ミュウちゃん、もうやめとけよ」

「大丈夫！」

キッとした目で徳利を奪い返した美悠は、「ほら、課長も飲んで！」と雅人のグイ呑みに酒を注ぎ、再び則尾に目を据えた。

「それで日米関係がどうしたんですかあ？」

戸惑い気味に「うん……」とうなずいた則尾は、

「つまり3大秘湖は大きな湖に寄り添っていたから3大秘湖なんてポジションが得られた。これを日米関係にあてはめると、日本という小国はアメリカという大国に寄り添っていたから世界第二位のGDPを誇る国になった、というわけさ。だから日本がアメリカを無視して勝手に暴走するのは本末転倒もはなはだしいつてメッセージ。もつといえ、米国の恩恵をしっかりと認識し、これからも米国に寄り添っているつていうメッセージ、それが3大秘密に遺体を遺棄した理由さ」

そこまでいった則尾はお茶で喉を潤し、

「ただし最後のオコタンペ湖で殺害されたのはCIA要員だ。これに関しては、ボクも悩んだ。でも答えは意外と簡単だったよ。オンネトーと東雲湖が米国のメッセージとすれば、オコタンペ湖は長嶺からのメッセージ、つまり、『おまえらの意図は読めている、それがどうした』つていう挑戦状だ」

則尾の謎解きを聞きながら、雅人の脳裏には、七海とはじめて逢ったオンネトーの光景が浮かんだ。あとき七海は初々しい芽吹きの大気に異彩を放っていた。そのオンネトーにも、あとひと月足らずで紅葉の季節が訪れる。わずか半年の短い緑光……その儂さが七海の姿と重なり、雅人を寂然とした想いに誘った。

「大前くん……」

則尾の声が雅人を現実へと引き戻した。ハットとして顔を上げると、則尾が顎を突き出し、雅人の隣を示した。

美悠がテーブルにうつぶしている。雅人は慌てて店の時計を確認した。時刻はすでに終電ぎりぎりになっていた。

「ミュウちゃん起きろよ。時間がヤバイよ」

しかし美悠の反応はない。雅人はその肩を軽くゆすり、

「ミュウちゃん、ほら、起きろってば！」

美悠が「いや……」とうるさそうに雅人の手をはねのける。

「いやじゃなくて……早くしないと帰れなくなるよ」

「いいの……」

「よかないよ、ほら」

美悠の腕をとって立ち上がらせようとしたとき、則尾が意味ありげな表情で笑んだ。

「えへへ、ミュウちゃん、今夜は三人で大前くんの部屋で寝るか？」

「則尾さん、バカなことってないで彼女を起こしてくださいよ」

「でもなあ、この状態じゃあ電車に乗せたほうが心配だぜ」

たしかに則尾のいう通り、無理に終電に乗せても、まともに横浜の実家に帰れるかどうか怪しい状態である。

「大前くん、腹をくくって泊めてやれよ」

「そりゃ、まずいですよ」

「なにが？」

「彼女はオレの部下ですよ」

「関係ないよ。お互いに独身だろう。それに彼女は大前くんに惚れてるぜ」

小声でいった則尾は、美悠の耳もとに顔を近づけた。

「ミュウちゃん、大前くんの部屋へ行くかい？」

則尾の声に、うつぶした美悠が「うん……」と反応する。

「ほらね」

則尾は思わせぶりにウインクした。

人通りが絶えた歩道には、初秋の涼気が漂っていた。

美悠を支える雅人の腕に体温が伝ってくる、ときおり微風にあおられた彼女の髪が頬に触れ、アルコールのにおいに混じった彼女の体臭が、心地よく鼻腔をくすぐった。

《ミュウちゃん、こんな匂いだったんだ……》

美悠の存在感を強く意識したとき、横を歩く則尾がいった、

「もうひとつ話しておきたいことがあったんだ。長嶺たちのことだけど……」

「なにか新しい情報が入ったんですか？」

「3大秘湖のメッセージに気づいたことを、すぐに電話で福田に伝えたんだけど、そのとき、やつから長嶺生存説の根拠を聞いた」

「根拠なんてあるんですか？」

「長嶺は中国に身を隠しているかもしれないっていった」

「中国？」

「うん。福田がいうに、長嶺はこの計画を進めるにあたって中国の要人とも連携をしていくはずだってことだ。中国は北京オリンピックと上海万博（しやんぱい）を成功させ、本格的な経済成長へと踏み出している。これは日本が東京オリンピックと大阪万博を成功させ、経済の高度成長へと突進した方法と同じだよ」

そのあと則尾は、「大丈夫？」と、雅人の腕にすがって引きずられるように歩く美悠を気遣った。美悠は「うん……」と鼻声で小さく応え、雅人の腕に顔を伏せ、体重を預けた。雅人は彼女の腕を自分の肩にかけ、抱き上げるように腰へ手を回した。ミニグラマーだとは思っていたが、そのウエストの細さと肉付きをてのひらに感じ、ドキッとしてしまった。

「こうして支えていれば大丈夫ですよ……まったく、しょうがねえなあ」

内心をごまかすようにいった雅人に、一瞬、意味ありげな表情を向けた則尾は、フフッと小さく口吻をもらし、話を継ぎながら歩きはじめた。

「さっきいったことは、長嶺の『ドラッカーの限界』にも書いてあったことだ。つまり、中国はマネジメントに関して日本の手法を研究して模倣した。それと同じように日本の経済成功をたくみに分析し、まねしようとしている。福田がいうには、おそらく長嶺は、今回の経済混迷を脱け出したとき、アメリカに代って世界の経済情勢を支配するのは中国だと読み、東アジア政経連合の推進役として期待しているようだってね」

「でも中国は共産政権ですよ。市場経済主義なんてへんてこな主義で誤魔化しても、人口の数パーセント程度の共産党員が支配する共産国家じゃないですか。それに国内の収入格差や少数民族の問題など、深刻な内政事情だって抱えているでしょう？」

「うん、たしかにそれはあるけど……これは、あくまで福田の想像だけだね、今の中国は社会主義や資本主義に代わる新しい経済主義への移行を画策しているらしいんだ。そのヒントになるのは、長嶺が『ドラッカーの限界』のなかでチラッと触れている『生産性主義による知識経済社会』じゃないかってことだ」

「それ、なんですか？」

「ボクも聞きかじった程度だけど……物質や資産など資本の論理が経済の軸を握る資本主義に対し、資本や知識の生産性という価値が軸を握る社会、つまり現在の資本主義の次に来る社会経済論らしい。それを総括する言葉が知識経済社会ということだ」

「なんだか漠然として、わかりにくいですね」

「まあ、この領域の理解は福田に任せるとして……もし福田の読みあたっていれば、アメリカ経済が本格的な凋落を迎えた機を狙い、長嶺はかねてからこの計画のために連携を図っていた中国要人や韓国要人の力を借りて、東アジア政経連合創生への具体的なアクションを起こすはずだってさ。そのためにも米国政府や日本政府が手を出せない中国へ潜伏している可能性が高いってことだ」

《もしかしたら七海も……》

雅人の脳裏に不穏な想像が浮かぶ。

「則尾さん、もしそうになったら、長嶺はもう一度表舞台に現われと思いますか？」

《長嶺が再登場すれば七海も……》

そんな儚い期待が疼く。しかし則尾は「どうかな」と片頬をゆがめた。

「長嶺たちの自殺だって真偽がハッキリしないし、米国経済をこれ以上震撼させ、本当の

凋落に陥れるなにかが起こるかどうか……すべては仮定の上に成り立つ話だからね」

「福田さんの予想通りだったとしたら可能性はありますよね？」

「ないことはないけど……」

則尾はつぶやくようにいうと、急に道路に向かって手を上げ、タクシーの空車を止めた。

「大前くん、ボクはここで失礼するよ」

「え！ いきなりどうしたんですか！？」

「キミたちを見ていたら、急に行きたいところができたんだ。懐も温かいし、明日からは連休だし、少しは息抜きしないとね」

「ちよ、ちよっと待ってください。ミュウちゃんはどうするんですかぁ！」

「そんなこと自分で考えろよ。大丈夫、誰にも話さないから」

則尾はそう残してタクシーに乗り込んでしまった。

《どうしたらいいんだ？》

雅人は、突然訪れた事態に戸惑い、肩にすがる美悠をおずおずと見た。

《二人だけじゃ、まずいよな……》

そう思ったとき美悠が億劫に顔をあげた。

「課長……」

「え！？」

「課長は……竹崎先輩のこと、好きだったんでしょ？」

「ど、どうしたんだよ、いきなり……」

「課長……かわいそう……」

いいながら美悠は、雅人にすがりつき、胸に顔をうめて、ひくひく泣きはじめた。

「ミュウちゃん……」

雅人は反射的に小さな体を抱いた。雅人の背にまわった美悠の腕に力がこもる。

「課長、かわいそう……竹崎先輩もかわいそう……」

胸に響く鼻声とともに、心臓の上のはだが湿った感触で温まっていく。その温もりとは裏腹に、妙に冷然とした現実感が、茫洋とした酔いの意識の底から湧き上がった。

《もし、長嶺たちと一緒に七海が現われるようなことになっても、そのころオレはもう七海とは遠いところにいるかもしれない……》

薄らいでいく夢想を追うように、そんな思いが脳裏をよぎった。

《丁》